



ワールドトークRPG! 2

W O R L D T O K U R P G ! 2

しろやぎ
Shiroyagi



アルファライト文庫 

主な
登場人物
Main
Characters

ヘルムート・
シャリエ

通称“ベストプリンガー”。
アンデッドの魔術師。

ユルセールV世

ユルセール国王。
メテオたちの抹殺を企む。

ハム

ウォルスタ自警団長。
武器マニアな戦士。
メテオの仲間。

リーズン

ウォルスタの領主。
エルフで精霊使い。
メテオの仲間。

メテオ・
ブランディッシュ

本編の主人公。伝説のパーティー
シューティングスター
「流れ星」のリーダーで、
ウォルスタの魔術師ギルドの長。

ガルーダ

リトルフィートの盗賊。
メテオの仲間で
トラブルメイカー。

エステル

メテオの弟子で魔術師。
賢者レベルが高い。

メル

メテオの護衛を
している戦士。
無邪気な性格。

アーティア

ウォルスタの商業神神殿長。
守銭奴。メテオの仲間。

そして俺——杉村前賢は、並外れた経験点を持った状態で、どういふわけか自分のキャラクターであるメテオ・ブランディッシュとして、テーブルトークRPG『アータレウ』の世界に迷い込んでしまった。

この世界の神様になった石井先輩と出会ったが、なぜこうなったのか、どうすれば戻れるのかは、はっきりとわからなかった。

目覚めたとき、俺の目にはまっ平らな天井ではなく、アーチ状に湾曲した帆布のそれが映った。

早朝であることを伝える野鳥のさえずりが聞こえ、帆布の隙間から朝日がさし込み暗い馬車の中を鋭く照らす。

何か夢を見ているような気持ちではあるが、これは夢ではない。

ゲームマスターである石井先輩が事故で亡くなった。

1 覚悟と成敗

アータレウRPG

キャラクター名

メテオ・ブランディッシュ

種族名

ヒューマン

性別

男

年齢

26 (16)

職業属性

魔法使い

LV スキル名

17	魔術師
3	賢者
10	精霊使い
10	神官
10	盗賊
1	ゲームマスター

経験点

717,560

所持金



キャラクターの肖像・特徴

重要なアイテム等

- ・無限の革袋
- ・魔術師の杖 (魔法の発動体)
- ・リング (魔法の発動体)

...etc

STR
36

DEX
36

AGI
34

INT
118

VIT
114

MND
518

——せっかくなので、『アヤタレウ』で冒険をしながら元の世界に戻る方法をゆっくりに探すか。

そんな気軽な気持ちでいたのだが、一国の王様からなぜか命を狙われている気がする。しかも、この世界で俺は伝説的な冒険者パーティ『流れ星』のリーダー。つい昨晚も、暗殺者に命を狙われたところだったりする。

幸いなことに、莫大な経験点を使って能力を底上げした俺は、この世界ではほぼ無敵とっていい魔術師だ。

ただし、テーブルトークRPG『アヤタレウ』のシステムであった、『絶対失敗』と『完全成功』——ダイスの目次第で、パラメーターに関係なく失敗、もしくは成功するというもの——は健在だ。どんなにレベルが上がっても、パラメーターが勝つていても、油断することはできない。昨夜もそれでヒヤッとしたものだ。

俺は馬車の帆布をめぐりあげ、朝の清々しい光を存分に浴び、さわやかな空気を胸いっぱい吸い込んだ。

野営を任せていた俺の弟子である魔術師の美少女エステルと、護衛である猫族のメル。どうやらふたりとも無事に野営をやりおこなったようだ。

「おはよう」

「お師匠様、おはようございます」

「メテオ様おはようですニヤー!!」

ニヤー？

メルの語尾がちよつと俺好みだったような気がするが、気のせいか。

「実は昨晚、盗賊団らしき一団に襲われたのですが、わたしとメルで退治しておきましたっ」

「やったっけたのー!!」

エステルとメルが褒めてといわんばかりに胸を反らし、指さした先には……

総勢十五名がロープで縛られ、抜きたての大根のように横たわっていた。

「こりゃ大漁だ。よくやってくれた」

「メル、いつもより身体の動きがキレキレだったの!! 絶対調だったニ……なのー!!」

ん？ 今また語尾が……まあいい。どうやら俺のゲームマスタースキルでメルのレベルを上げたのは効果があったようだな。

しかし、この世界のキャラクターは自分でレベルを上げられないのか？ 才能みたいなものがあったって、あとは頭打ちになって経験点がプールされていくとか？

——俺がこちらの世界から持ち越した経験点みたいに。

ゲームマスタースキルについてはまだまだ研究が必要だな。

さて、昨晚は途中で眠ってしまったのでどうなったかはわからなかったが、あらためて

朝日の下で緊縛された野党の一群を見るのはなかなか爽快だ。

「一応聞くが、何かいつていたか？ 例えば俺たちを狙った動機とか理由とか」

「はい、一応聞きました。単に狙いやすい馬車がいたから襲っただけだそうです。他意はないようですが」

まあそうだな。仮にも魔術師ギルドの長がいる馬車を襲うのに、何の作戦も立てないなんて、知っていたとしたら不用心すぎる。あるいは王都ユルセルの迎賓館で会ったあの……ちょびヒゲの王宮大臣？ 名前は忘れてしまったが、あいつあたりが俺たちを襲撃するように頼んだのかとも思いました。しかし、頼まれものだったら経緯をペラペラ喋って許してもらおうとするだろう。本当にたまたま俺たちを狙っただけにちがいない。運の悪いことだ。

「あんたがリーダーだな」

俺は昨日、頭に岩を落としてやった男に詰め寄る。もちろん彼は、両手両足を縛られ身動きが取れない。

「……ああ。静かにしていれば命までは取らないってあそこの女が約束したから、全員静かにしていた。俺たちを解放してくれるのか？」

さすがは、盗賊団とはいえリーダー。覚悟を決めて俺と交渉するつもりでいるようだ。もちろん俺だって無益な殺生をするつもりはない。

「質問に答えてくれればな。いつておくけど嘘をついたらわかるからな……？」

「あ、ああ。こうなったら嘘なんてつかない。何でも喋るから命だけは助けてくれ」

これみよがしに魔法使いの杖を見せて念を押す。《嘘感知》などは使っていない。だが、散々俺たちの実力を見たあとだ。わざわざ嘘はつかないだろう。

「まず、俺たちを狙った理由を教えてください」

「若い女ふたりが見張りの馬車だ。カモだと思っただ……実際はとんでもないバケモノだったかな」

俺も、メルがあそこまで使える戦士だとは思ってなかったから、そこは同意する。

「誰かに頼まれて襲ったわけじゃないと？」

「もちろんだ。なんだ、あんたらそんなに命を狙われるような大物だったのか。失敗したな」

この盗賊けっこう肝が太いな。生殺与奪が思いのままの人間に対してずいぶん軽口を叩く。

「なかなか言葉に余裕があるな」

「こうなったらへりくだっても仕方ないしな。気に障ったなら謝る。なにぶん盗賊団だ。育ちが悪いもんでな」

「あんた面白いな」

俺は楽しくなってきた。実際テールブトックのセクションで倒した盗賊団にも、こういうのいたなあ。

「よし、命までは取らないから、今後はまっとうに仕事して暮らしていくんだな」

「そんだけでいいのかい？ てっきりユルセールの騎士団まで連れていかれるかと思っただぜ」

「ああ、ユルセールの騎士団に渡したらそのまま打首とかにされそうだしな。それじゃあ助ける意味もないかと思って」

「……あんた、お人好しだな。そんなじゃすぐに騙されて痛い目に遭うぜ」

「いや、そうでもないと思うんだが。——メル、エステル。もうちょっと離れていてくれ。そう、馬車のあたりまで」

ふたりを下がらせて、俺は呪文を口にする。杖を地面に突き立て、背筋を伸ばして精神を高める。この魔法は少しばかり時間がかかるからだ。

「聞け、わたしの声を。見よ、わたしの姿を。約定を守らせる者の姿を。今より交わされるのは神聖な契約。守られれば痛みも苦しみもなく、諸人は安らかな昼のうちに過ごせるだろう。だが一度破られれば、咎人は痛みを伴う夜に生きるだろう——」

「な、何を……!?!」

いつもの上位魔法語——圧縮されて一言に多くの意味を含んだ言葉——での呪文詠唱

ではあったが、この呪文は長く長く、言葉が鐘の音のごとく後を引くように、ゆっくりと唱えなくてはならない。この世界で使うのは初めての魔法であったが、もちろん使い方は理解していた。

「痛みも苦しみもともにすることができれば、その傷痕を愛することができるよう。その夜があればこそ汝らの昼もまた価値を持つ。いざさらば。これから後、わたしの言葉を忘れることなく、契約は守られるように。《契約の儀式》」

長い呪文。実際に韻を長く伸ばしたこの呪文は、実時間で数十秒はあっただろう。「契約内容を命ずる。人から物を奪うな」

盗賊たちを覆っていた魔力が掻き消える。といっても、魔力を持たないであろう盗賊たちは、俺に何をされたのかもよくわかるまい。

「よし、これでいい。あとは好きにするといいさ。エステル、メル、こいつらのロープを解いてやれ」

盗賊たちは怯えたような目で俺を見る。

「魔法使いに何かされた」ということだけはわかるようだ。

「お前たちにかけたのは契約の魔法だ。人から物を奪わない。限り、生活に支障はないから安心してくれ。盗賊団なんてやめて、まっとうな人生を送るんだな。じゃあ」

それだけいって、俺は馬車に乗り込んで街道を行く。

どんな人生を送れるかはあいつら次第だ。
 ガタゴトと音を立てる馬車の後方で、さっそく身の毛もよだつ絶叫の合唱を聞いた気がする。もう何かを盗もうとしたのか。道は険しいな。

「お師匠様。さっきの魔法なんですけど、わたしの知らない魔法でした。詠唱時間も通常より長いようですが、何という魔法だったんですか？」

御者台でゴーレム馬のコメットを見ている俺に、馬車の中からエステルが顔をのぞかせた。

「あれは……《強制》みたいな魔法だな」

エステルにわかるように説明する。レベルでいえば、彼女もすでに《強制》の魔法を習得しているからだ。

「一度の魔法で、あれだけの数に影響を及ぼしたのですか？ 正規の魔術書には載っていない魔法みたいですが、お師匠様の独自魔法か何かでしょうか」

「一応禁呪だからな。俺にしてみればどうしてこれを禁呪にするのかはよくわからないが」

禁呪というのは、『アヤタレウ』のシステムにおいて、プレイヤーが使うのにふさわしくない魔法で、通常ではプレイヤーが修得できないものことだ。

この魔法もまた、プレイヤーが無辜の住民などに対して使うと大変なことになってしまうから、禁呪指定なのだろうが……

《契約の儀式》のレベルは9。正直、9レベルの魔術師なんてもう、一般市民からするとチートといっても過言ではない。その気になったら町のひとつ、もっといえば国家をひとつ食い物にすることだってできるレベルだ。だから、そんなレベルの魔法を禁じたところで何の制限になるのか、という気はしている。

「エステルが使えるレベルになれば教えるが、《契約の儀式》はざっくり説明すると、集団に《強制》の魔法をかけるような感じだ。が、いくつか違う点がある。まず、呪文の詠唱時間だ」

興味津々に俺の話の聞いているエステルに、魔法のレクチャーをしてみる。魔法発動の技術論や理論は知らずに、勘でやっている俺だが、魔法の使い方や効果については語るこ

とができるからな。
 「対象の数が多ければ多いほど、呪文の詠唱は長くなる。単純に十人の人間に効果を及ぼそうと思ったら《強制》の十倍の詠唱時間がかかる。つまり、身動きできない人間相手じゃないと、詠唱中はスキだらけだ。これに注意しなくてはいけない」

《強制》も、身動きできない相手以外にかける魔法じゃあないんだけどな。

俺は、自分の身にもかけられている《強制》の痛みを思い出して、股間がヒュンとした。

「時間はかかるけれども、MND^{精神力}の効率がいいので制圧した相手にかけるのが定石だ。が、《強制》と違うところがあって、同じ呪文をかけられた者同士は、罰則も共通するということだ」

「罰則も……共通ですか？」

「ああ。ひとりが設定した契約内容に違反すると、全員が罰則を——《強制》の激痛を受けることとなる。これは距離や人数にかかわりなく、一律で被る。つまり、ひとりがダメな奴だと、そいつ以外が改心してもペナルティを喰らい続ける」

先ほど背後で響き渡った悲鳴の合唱は、そういうことだ。

「——罰則。痛みの度合いなどは調節できるのですか？」

「できない。《強制》と同じく術者の力量にもよるけれど、強くなることはあっても弱くなることはない」

魔法の達成値が高ければ高いほど、罰の痛みは強力になる設定だ。加えて、強制力も強くなる。その達成値を上回るMNDがあれば、理論上は痛みに耐えながらも、強制された事柄に背いて行動することができる。

しかし、飛び抜けたMNDを持つ俺が実際に喰らってみて思ったのだが、ガマンしようと思つてできる痛みのレベルではない。

「……やはり禁呪であるべき魔法かもしれませんね」

「ん、どうしてそう思う？」

エステルは真剣な表情で考え込んで、そして答えた。

「痛みが連帯責任だとすれば、責任を果たせる者は責任を果たせない者を疎ましく思うからです。おそらくは、その……連帯責任を有する資格を奪うことになると思いませんか……」

遠回しな表現だが、つまりエステルはこういつているのか。

「ルールを守れない仲間を殺すだろう、ということか」

「……はい」

確かにそうかもしれない。

あの十五人の中にいつまでも手癖が悪い者がいれば、あの神経を直接削られる痛みを四六時中味わうことになる。

俺が設定した人から物を奪うな、は、物ではない人の命、は含まれないかもしれない。

あの痛みを知る者なら、滅多なことでは殺人をしようという気にならないだろうが、いつ痛みを味わうか、おっかなびっくり人生を過ごすよりはいいっそ——と、考える者も出てくるだろう。

俺はわりかし軽い気持ちであの魔法を使った。

ちよつと懲らしめるか程度の動機だ。

あいつらのその後の人生を考えれば、もつと考えて使うべきだったかもしれない。

「……そうだな。俺は軽々しく魔法を使つたのかもしれない。反省するよ」

「いえ！ そういう意味ではなかつたんです!! じゃあ、あの人たちをどうすればいいかとなつたら、わたしも一人ひとりに《強制》をかけるくらいしか思いつきませんし……ただ、恐ろしい魔法だと思つただけなんです」

確かに恐ろしい魔法だ。魔法をかけた後、複数の人生を《強制》以上に縛り、かつ自分の努力ではどうにもならない点がある。高確率で人間関係にヒビを入れ、悲劇を生み出す。それが《契約の儀式》が禁呪たるゆえんなのかもしれない。

「いや、俺はあの魔法を使う覚悟がなかつた。いまだゲーム感覚があるつてことだろう。ありがとうエステル。これからもびしびしツツコミを入れてくれ。頼む」

「ゲーム……ですか？ あ、いえ。生意気な弟子ですみません。こちらこそよろしくお願ひします!!」

「野営で疲れているだろ。昼までにはボックに到着すると思つうから、それまで寝ているといい」

そうします、とおとなしくエステルは馬車の中に消えていった。あいつも夜襲の対応で魔法を連発しているからな。少しでも寝て回復してくれたほうがいい。

「……テールトックで魔法の使い方も、それをどう相手に使うかもわかつていたつもりだったけど、少し俺テンション上がりすぎているのかもな」

と、ひとりごちる。

テールトックRPGは、コンピュータ相手ではなく対人同士で進めるゲームだ。

たとえノンプレイヤーキャラクターといえど、ゲームマスターが演じるキャラクターである。その人生を弄んだりするような行為は慎んできたし、やりすぎた場合はマスターがそれとなく注意をしてくれたものだ。

だが、ゲームマスターの石井先輩はもういない。俺は、俺の常識や感情や理性でこのメテオというキャラクターを演じる。——いや、もう演じるなんてもんじゃやないな。生きなくてはならない。

先の盗賊たちに使つた《契約の儀式》が悪いことだとは思わない。

盗賊団たちも昨晩は俺たちをどうにかするつもりだったろう。殺さないで野放しにすれば、他の誰かが犠牲になつたかもしれない。先を急ぎたいので、わざわざユルセルまで盗賊を馬車に積んで戻ることもできない。俺にしてみれば、あれはベターな選択肢だつたと思つている。

「足りなかつたのは、覚悟だな」

盗賊団のリーダーの頭に岩を落としたときは、「これで死んでも仕方ない」と思つて

やった。

エステルとメルに危害を与える奴は許せないし、その結果として相手の命を奪うことになっても仕方がない。そう思ってたのだ。

しかし、《契約の儀式》で大勢の人生をいびつに狂わせる覚悟はなかった。

この世界は凶暴なモンスターもわんさかいる。

いずれは生物の命を奪わなくてはならないこともある。

もちろん人間だって――

想像して、少しだけ気持ちが悪くなった。

おそらく、ブーストされた俺のMNDが、罪悪感やタブーを犯す意識を軽減してくれている。

それでも「殺人」という言葉は気持ちのいいものではなかった。

「テーブルトークRPGのセッションでも……やっぱり誰かを殺したことだってあったよな」

ゲームマスターである石井先輩が、そうした直接的な言葉を使わずにやってきてくれた。だが、やはりゲームであっても命を奪ったことはたくさんある。

「できるだけ穏便に済ませる方法を考えなきゃな。なるべく殺人者にはなりたくない」
ガタゴトと進む馬車のはるか先に、おそらくは目的地であろう町の影が見えた。

俺は無意味だと知りつつも、ゴーレム馬であるコメントの手綱をびしりと打つのだった。

2 天候操作（雨）の魔法

休息も食料も不要なゴーレム馬のコメントは、軽快に街道を進む。あたりはもう完全に麦畑だ。

といっても俺は生麦など見たのは初めてなので、これが小麦か大麦なのかもわからない。ボックはユルセルでも一、二を争う畑作地帯。ことに主食であるパンを作る麦作が盛んだ。本来ならば土地も豊かで雨量もあり、山からの水もあるので、干魃のようなことは起こりにくいと思うのだが……

まず、異変に気がついたのはメルだった。

「このへん空気がすっごい乾燥しているよー、なんだろうー」

馬車の中から鼻面を出して告げる。

思えば麦畑の麦たちも元気がないようだ。

少し前に通った麦畑の穂は青々として空高く伸びていたものだが、ここの麦たちは色といい成長具合といい、何かこう頼りない。

「言われてみれば」

長く雨が降らないというのは、こういうことなのだろうか？

俺は水の国である日本の上下水道という文明の恩恵に、どっぷりであつたので、水が足りないということについては今ひとつピンとこない。

「早いところボググに行つて雨を降らせようか」

俺は少しだけ馬車の速度を上げる。しかし、進めば進むほど、少しずつ確実に小麦の色が緑色から茶色がかつた元気のない色へとグラデーションしていくのだった。

昼ごろ、ボググの町へと到着したのだが、なんとというか、町は乾いていた。馬車を通るたびに土埃がひどい。街路樹も露骨に元気がない。

「書状を持つていけばつて話だつたけど、どこに持つていったらいいのやら」

チョコビひげのおっちゃんから貰つた書状は、封蝋のしてある卒業証書入れみたいな筒に入っている。封蝋には一応ユルセルの紋が入っているとエステルが指摘するのだが、それなのに国務じゃないから予算が出ないとか、どれだけケチなの……

「おそらく町長の館に行けばよいのかと思います。このまままっすぐ進めば大丈夫です」
エステルは一度この町に来たことがあるのだという。

町長の館へはすぐにたどりつき、門番に書状を渡すとそのまま馬車ごと通された。どこか疲れたような顔をした男のもとに通される。彼は、自分がボググの町長だという。すつ

かり覇気を失くしているが、こう見えても、れつきとした貴族だ。

「あなたがかの『流れ星』のメテオ様……あ、いえ。ずいぶんお若いのだと思ひまして。他意はございません!!」

町長は俺を見てびくくりしていた。評判のほどはともかくとして、確かに高レベルの魔法使いとは思えないよな……外見年齢は十六歳なわけだし。

「お気になさらず。魔法の腕はそこそこですので大丈夫ですよ」

「はあ……いや、本当にこんなお若い方が、あの伝説の冒険者なのかと驚きました。数年前にウォルスタの町を作られたというから、いったいどれだけの才能をお持ちなのかと」

「魔法使いなので」

魔法使いなので、という常套句は、大変便利なので積極的に使っている。一般人であれば、この言葉でたいていのことは納得してくれる。

「そういうものですか……それでは、この町の事情をお話しさせていただきます。お付きの皆さまもどうぞこちらに。簡単なものですが、昼食を作らせていただきましたので」

あちゃー。食事を用意してくれたか。エステルがなげられ。なんてことを思いつつ、町長の屋敷に通される俺たち。

出された食事は、量はあるがそれほど豪華なものではなかった。だが、この世界では初めて食べる山型食パン。焼きたてらしくふわふわしていて、じつにうまい。関係あるかは

わからないが、麦畑が近いだけある。

改めて感じることだが、この国の食文化レベルは高い。今のところ、ハズレはワインくらいだ。あれだつて保存が問題なのであつて、ものは良いものだった。このぶんでいけば、俺の好きな麺類も存在するはず。さらにはソウルフードである米も、どこかでほかほかに炊かれていますかもしれない。生食の魚文化なども興味がある。

俺とメルは、不自然にならないように自分の食べたパンの半分をエステルに渡している。子供のころ、食事に入れられた毒が原因で一家を亡くしているエステルにとって、外食は緊張を強いられる。

そんな俺たちのやりとりにも気がつかず、町長は村の近辺のことについて語り出した。要約すると――

二ヶ月ほどまったく雨が降らない。

それどころか、山から流れる川まで干上がり始めている。

どういうわけか空気まで乾燥している。

というものであつた。

「何か雨だけが原因でもないような……まるで砂漠地域みたいなことになってますね」

「ええ。原因が皆目見当もつかず……近頃では井戸も出が悪くなつてきているので、町者の心配はもうたいそうなもので」

「エステル。メル。何かこういう気象現象に心当たりはないか？」

「……ちよつと思いつきません。ただの干魘とも違うようですが」

「メルはわかんない」

「んー……」

俺も何がなんだかさっぱりだ。

だが、ひとまずオーダーであつた雨を降らせてみよう。

「町長さん。根本的な解決になるかはわかりませんが、ひとまず雨雲を呼び寄せてみたいと思います。できれば空が見えて、あまり人目につかないような、この館の屋上かテラスにでも案内していただけますか？」

「やっていただけますか!! 屋上はありませんが、大きめのバルコニーならございます。こちらです」

案内されたのは、正面玄関のちょうど上にあたるバルコニー。ちよつとしたパーティができそうなくらい広い。空も十分確認できるし、一般人の好奇の目にも晒されない。申し分ない場所だ。

「わたし《天候操作》の魔法を見るの初めてです」

「メルもー!!」

この大陸には、俺以外にこのレベルの呪文を使える魔術師はいないみたいだからな。今から使おう《天候操作》コントロールウェザーは、国家レベルに影響を与える魔法だ。

俺はこれから雨を降らすためにこの魔法を使うが、その逆も可能だ。根気があればその国に何ヶ月でも何年でも雨を降らさないことだってできる。むしろ雨をやませないこともできる。

だから俺が最初にこの町の話聞いたとき、別の大陸から来た高レベル魔術師の仕業かと思つた。

ただ、動機が謎だった。《天候操作》コントロールウェザーは9レベルの魔法。俺以外にこの魔法を使える者がいたとしても、高レベル魔術師ならば動機もなくこんなことはしないだろう。

「いろいろ謎だが……ひとまずこの乾燥だけでもなんとかしてあげたいな」

俺は乾いた唇をひと舐めして呪文を唱える。呼ぶべきは雨雲。それも効果をできるだけ拡大して、俺たちが通つてきた、乾き始めあたりにまで効果を及ぼしたい。

「我が魔力、大気に満ちよ。天変覆いて境地に至れ。糸を紡ぐように雫を布に。その織物を以て雨雲を纏い、舞いおどれ。万雷の拍手が地異に降り注ぐまで。《天候操作》コントロールウェザー」

十分に魔力をつぎ込み、効果エリアを拡大した《天候操作》コントロールウェザーを発動させる。

この魔法は儀式魔術の一種で、雨雲を呼び寄せるまで精神を集中させていなくてはなら

ない。時間にしてほぼ五分。それまでの間、俺は杖を片手に魔法が凝びぬよう集中する。集中を解けば天候は徐々に回復してしまう。

俺が呪文を唱えてほどなくすると、どこからともなく黒っぽい雲が集まりだした。

やがてその雲は本格的に全天を包み込み、大気が湿り気を帯びる。

「おお！ 空気が!! 空に雨雲が!!!」

「すごいー!! メテオ様すごいー!!」

町長とメルが叫ぶ。俺は魔法の制御で相槌も打てないのだが、ほどなく豪雨レベルで雨が降り始めるだろう。

ぽつり。

俺の鼻面に雨粒が落ちた。

その一粒はやがて二粒になり、三粒になり。無数の水玉をバルコニーの床に作つた。

「雨だ！ 雨だ!!」

そして本降りに――

「あれ……雨雲が」

――ならなかった。

俺の魔法で呼び寄せた黒い雨雲は、積もつたホコリを掃除機で吸い取るかのごとく消え去つた。

「えっ。何で!? もう一回だ!!!」
再度《天候操作》を発動させる。

やはり同じように、雨雲からは望むような雨は降らず、すぐに散らされてしまった。
「なんだこりゃ!? こんなあり得るのか!!!?!?!?!」

大魔法使いらしくもない。俺は思わず叫んでしまった。いや、姿といい言動といい、もとも大魔法使いらしくはないのだが。

仮に魔法使いがどこかに隠れていて《天候操作》の解呪を試みたとしても。俺のえらく高い魔力の魔法を解呪しようとするなら……それはあらかじめ大掛かりな儀式でも組んで魔術師を数十人集めていれば可能かもしれない。

だが、それにしたって、自分の魔法が他者の干渉で解除されればその感触は伝わる。それも感じさせずに《天候操作》の効果を打ち消すなんて、ちよつと考えられない。

しかし、実際には俺の魔法は効果を及ぼさなかった……

これは一体どういうことなのだろうか。

「町長さん。魔法は成功しましたが、どういうわけか何かが雨雲を散らしている模様です」

「そ、そんな、誰がいったいそんなことを」

「わからないです。が、どうもただの干魘じゃあなくて、もつと根が深そうなことはわか

りました」

俺は自分の呼び寄せた雨雲がきれいさっぱり消滅したあとの、カラッとした晴天を見上げる。

ちよつとだけ、悔しいな。

自分の魔法がこんなにも簡単に失敗、というか思った効果を上げられないのは、この世界に来て初めてのことだ。

悔しい気持ちと同時に、胸の中が熱くなる。

初めてテールブートのセッションをしたとき、村人と家畜を襲うゴブリン討伐のため洞窟に入って、命からがら退治をしたときのような昂ぶり。

冒険の気配を感じた。

「ボ、ボッグはいつたいたいどうなるのでしょうか……」

頭を抱える町長。だが俺は自信たっぷりな声で告げるのであった。

「ここまで来たのも何かの縁。冒険者『流れ星』にお任せください」

新生『流れ星』の初依頼だ!!

3 情報収集(前編)

馬車とコメットを町長の屋敷に預け、俺たちはそれぞれ情報収集にあたる。三人一緒に動いてもいいのだが、どうせなら手分けして町の様子を確かめてみようというわけだ。

タダ働きとはいえ『流れ星』で受けた仕事だ。

さっちり解決してやろうじゃないか。

×××

失敗しちゃったけど、メテオ様の魔法はすごかったなー。

雲がもくもく現れたと思ってたら雨が降ってきて。

すぐにやんじゃったけど、さすがメテオ様!!

あのときの雲はつつすら山に消えていった気がするの。

そのことをメテオ様にいったら……

「よしメル。お前の観察眼を信じて山に向かう方向で話を進めよう。武器屋や雑貨屋なんかで最近何か変わったこととか、山に向かっていた怪しい奴がいなかとか……適当な雑貨を買ったついでに話を聞いてきてくれ。今から遺跡探索に行くって理由でせ」

メルはメテオ様の護衛だったから、別行動しちゃうのは気になるけど……

今のメルは冒険者だから情報とか集めるよ。

冒険者としても、メルはメテオ様のためにがんばるよ!!

ボッグにある一番大きな武器屋は雑貨屋さんも経営していたのでラッキー。

適当な雑貨……保存食とか悪い奴を縛るのに使ったロープとかかな。

「おじさん。おいしい保存食あるー? あとはロープを十メートルくらいー」

「お、猫族のお嬢ちゃんか。やっぱり保存食は魚がいいのかい?」

「うん。お肉でいいよー。パンとかも一緒ねー」

人間族は猫族というところ「お魚が好き」みたいなこと聞いてくるんだよね。メルも故郷の仲間たちもみんな好き嫌いなくなんでも食べるのに。

「ロープは、十メートルにもなると、かさばるから絹製のやつにしておくかい? 綿や麻よりかは割高だが軽くて扱いやすいぞ」

「うん。絹ロープがあればそれにしておいてー」

「あいよ。ちょっと待ってな」

おじさんがロープをでっかい糸車からたぐりだして測っている。くるくる回るものを見ていると飛びつきたくなくなるけどガマン。

「絹ロープって高いけどよく売れてるのー？ けっこう在庫が減ってるみたいだけどー」
 「いつもはそんなに出ないんだけどな。最近山に登るって冒険者が多くてわりと出てるんだ。町の間なら絹のロープは警沢だから絹か麻を買っしな。絹ロープは荷物を少なくしたい冒険者たち御用達みたいなものだ」

「へー、メルもあの山に登るから一緒だねー。どんな人が買っていたのー？ まだ山から帰ってきてないのかなー？」

「まだ帰ってきたって話は聞かないな。なんだ、人探しか」

「ううん。今から山に遺跡があるか探しに行くんだけど、先に見つけてたら無駄足になっちゃうしー、どんな人たちがわかっていればケンカにならないから!!」

「冒険者たちだから、そんなこともあるか」

おじさんはロープをくるくるまとめて、保存食も一緒に出してきてくれた。ロープは十メートルよりもちょっと長めに切ってくれたー!!

「ひとりには、たいそう立派な鞆に収められた剣を腰に吊るした剣士だった。俺の店は武器屋もやっているんで、ちょっと見せてもらおうと思っただんだが断られちゃった。武器屋のカンだが、そうとう名のある剣だろうな。数日分の食料を買っていった」

立派な鞆に収められた剣？ それはちょっと気になる情報だニャ!! あ、田舎の言葉が心で出たー。メテオ様のところに来てから直すようにしているんだけどねー。

「あとひとり……あれは子供リトルフィットなのかな？ こっちは猫のお嬢ちゃんと同じで絹のロープと保存食だ。剣の兄ちゃんが三日くらい前で、ちっこいのが今日だ。ほんのすこし前に買っていたから仲間かと思ったぞ」

……ちっこいの？ なんだろニャ？

「おじさんありがとー。これで代金は足りるー？」

「ああ、少し多いから釣りを出さぞ」

「ロープちょっとオマケしてくれただしよー？ お釣りはいい!!」

「そうかい、ありがとよ。お嬢ちゃんの旅に商業神のご加護がありますように」
 山に向かったふたり。怪しいニャー!!!

× × ×

お師匠様とメルと別れて別行動。

メルは武器屋と道具屋。お師匠様は冒険者の宿。わたしは魔術師ギルドの蔵書検索と、それぞれ役割分担をして動くことになった。たぶんわたしが一番レファレンスに慣れている

るから。

お師匠様はよく零こぼしていた。

「僕は魔術の力量はともかく、魔法に対する知識や歴史というものに疎といんだ」

冒険者として叩き上げた魔術の技は誰にも負けない。でも、周辺知識はあまり強くない。そうもいつていた。そして、それは謙遜けんそんではなくて、わたしも本当のことだと思う。

わたしがお師匠様に唯一勝まさることがあるとすれば、それはこの世界の文化や一般的な知識、書物を紐解ひもとく技術、魔術の歴史や理論といったものの造詣ぞうぎ、賢者と呼ばれる人間たちの技術だけ。

お師匠様に冒険者として『流れ星』の仲間と呼ばれたときは嬉しかった。

今でももちろん嬉しい。

けど、自分が何をできるか。

栄光ある『流れ星』の名前を背負って何ができるのか。

そんなことを考えていたら、ちょっと心が重くなっていった。

だから、少しでも役に立ちたい。

以前からお師匠様に感じていた「お役に立ちたい」という気持ちはますます強くなってきた。

魔法使いとして、お師匠様の域に達するのはまだまだ。

冒険者としても、わたしの立ち位置はまだギルドにいたときのままの「補佐」なんだと思っつ。

でも、本当に自分はお師匠様にとって……『流れ星』にとって、役に立つ人間なのだろうか？ そう思わずにはいられない。

そんなことを考えながらたどりついたボッグの魔術師ギルドは、ウォルスタのそれと較べて小さなものだった。おそらくは魔法で強化された石造りの館。

わたしがウォルスタの魔術師ギルドの人間だとわかると、ボッグのギルド長は快く図書室の閲覧えつらんを許可してくれた。

お師匠様と呼んだ雨雲が、山の方に消えていったという発見をしたのはメルだ。

まずはボッグの南にそびえる山脈、リザール山脈を当たってみようということになり、山脈に何か古代遺跡やそれらしき伝承はないかを調べる。ご当地のギルドにならう一番詳しい文献があるだろうと思っつ。

それほど多くもないけれど少なくともない、魔術師ギルドとしては中規模程度の蔵書の中から、リザール山脈と山脈を越えたさらに南に広がる『魔の大森林』についての蔵書を取り出し、閲覧室の机の一角を本の山で埋め尽くす。

リザール山脈の出来事と魔の大森林の出来事はお互いに影響しあっていることも多い。無駄骨むだぼねになるかもしれないけれど、調べるだけ調べてみよう。

「よし」

気合を入れ直して、わたしは分厚い書物の一ページ目を開いた。

×××

「もっと簡単に終わると思ったんだけどもなー。ちょっと手間のかかる用事になりそうだ」

ボッグの冒険者の店『山脈亭』のカンバンが見えた。この町について町長がいろいろと教えてくれたのだが、ボッグはそこそこ冒険者の多い町なのだという。町の南にそびえるリザール山脈には古代遺跡が多く、見つければ一山当ても同然だとか。

ただ、ここ数十年で比較的安全な場所の探索はだいたい終わっており、最近ではあまり冒険者が寄り付かないという。残された魔の大森林に面した側はほとんど手付かずだが、出てくる魔物がかなりヤバいらしい。

『山脈亭』の扉を開く。一階が酒場で二階が宿という、いわゆる冒険者の店の典型みたいな作りのようだ。たまたま今日は冒険者パーティがいらないだけなのかもしれないが、マスターがひとりカウンターでグラスなどを拭いている。

「お、珍しいな。冒険者かい？」

「はい。ちょっとリザール山脈に登ってみようと思ひまして。あ、エール一杯ください」

俺はカウンターに腰掛けてざっくり店内を見回す。人はいないけれども小奇麗な店内だ。「ちょうど今、ウチの常連たちは山に登っているところだ。一度登ると早くとも一週間は帰ってこない奴らだから、しばらくはこんな調子だ」

マスターがニヒルに笑いつつ、エールのジョッキを置く。

「んで、坊主、仲間でも探してるのか？ 魔術師ひとりで冒険者っていうのもないだろう」

「後から仲間が合流するんで。……ぶふーすみません。エールもう一杯」

「坊主。なかなかいい飲みっぷりじゃねえか……ほらよ」

マスターはいくぶんギョツとしながらも、エールのおかわりを出してくれる。ついでに謎のナッツ類が入った小鉢も出してくれた。見たことないナッツばかりだけどうまい。

「さっき来ていたちっこいのも、身体のわりにはがぶがぶ飲んでたな。酒の強さは年齢や体格じゃないのはわかっちゃんいるが、いざ見ると驚くぜ」

「ん？ 冒険者はみんな山に向かってるんじゃないのかい」

妙な違和感を覚えて尋ねる。俺の勘が何かひっかかりを感じたようだ。

「流れの盗賊だろうな。何をしにこの町へ来たかはわからないが、リトルフィートに動機を聞くだけヤボってもんだ」

「……リトルフイートの盗賊か」

リトルフイートは『アヤタレウ』の世界において、人間とエルフとドワーフについて数の多い知的種族だ。それほど数は多くないが、人間の子供くらいの背丈で俊敏器用、好奇心旺盛でいたずら好き。そんな種族だった。

「たらふく飯を喰らってジョッキを四〜五杯飲み干してどっか行ったよ。ついさっきまでいたんだけどな」

「ひとりっきりのリトルフイートの盗賊ですよ。一緒にいなくてむしろ安心です」

「違いねえ」

俺たちは互いに苦笑した。

どうやら俺の知っている、リトルフイート像、というのは、この世界でも一致しているようだ。

「リトルフイートにはちよつと微妙な思い出があります。そいつは名前とか名乗ってましたか？ 外見とかの特徴とか……」

「名乗るとかそういうのはなかったな。外見はまったくガキそのもので、男だ。髪はぼさぼさの短髪で短剣を吊るして、顔は……いつも笑ってたなあ。少し小太りくらいだったか」

よくあるリトルフイートの特徴だな。まあいい、俺の知るリトルフイートであれば、呼

ばれなくても寄ってくるだろう。

「坊主の友達か何かか？ もしそいつだったら頼みがある。馬蹄ばていを加工した灰皿を持っていかれたみたいなんで、返してもらえると助かるってな」

「……あー……。もしそうだったら伝えておきます」

手癖の悪いリトルフイートもまた珍しくない。残念なことにあいつらは『盗んだ』という意識はなく『ちよつと借りていただけ』と表現する。俺も何度あいつに『借り』られたことか……!!!

「リトルフイートの他には、最近誰か来ましたか？」

「それくらいだな。あとは馴染みの農夫たちとか町の人間ばっかりだな」

冒険者の店とはいえ、一般人も多く利用しているタイプの店らしい。

ウォルスタにある冒険者の店——酒場兼宿屋の『猫屋敷』では、一般人の姿はほとんど見なかったが、俺が町の人間だったら通っているな。天然の猫カフェ……いや、猫酒場だからな。

「坊主。ジョッキがもう空のようだが……」

「あ。じゃあもう一杯。何かこの地方で面白い話あったら聞かせてよ。つまみ代わりにな」

「酒のペースといい魔術師のくせに世慣れた感じといい、坊主は若いがたいした冒険者っ

「ぼいな」

「まあ、そこそこってところで」

マスターはでっかいレンゲみたいなスプーンで、缶から豆をぎくぎく俺の小鉢こぼちに入れた語り始めた。

「そうさなあ。このあたりの山で一番ヤバかった遺跡の話でもどうだ。ありゃあ、この町で一番の冒険者パーティ『神槍しんそう』がいたときのことだ……」

マスターの話聞きながら、エールをいただく。

エステルとメルが帰ってくるまで、話のネタに困ることはないだろう。

この世界の経験が浅い俺には、なかなか興味深い話ばかりだ――

4 情報収集（後編）

数時間後、町のあちこちで情報収集を終えたメルと、魔術師ギルドでレファレンスを終えたエステルが帰ってきた。俺の方もさつき店であつぷり冒険者の話を吸収することができた。

持ち寄った情報をすり合わせてみる。

「立派な剣の男」というのがちらほら姿を現してくる。しかも仲間を伴わず、どうも単身で山へ向かっていったようだ。数日前の出来事ではあるのだが、帰ってきた様子はないう。

「うん。やはりこの町のパンはうまいな。野菜も味がいい。メル、何かおかしいにおいはないか？」

「だじようぶー。へんなものは入ってないよ!! メルが保証するよー!!」

冒険者の店が出てきた早めの夕飯。たくさんのスライスした山型パンと、三人で取り分けるよう壺つぼに入ったバターたつぷりシチュー。ペーコンとスクランブルエッグ。それに俺も知っているオレンジのようなフルーツがみつつ出てきた。

エステルが外食恐怖症ちこうびみたいなもので、メルと俺で毒見どくみ的なことをする。食べるだけだと、遅効性の毒どくなど盛られていた場合にヤバいかとも思ったのだが、メルが驚きの特技を持ってた。

「料理にへんなものが入っていたら、メルにおいでわかるよー」

といって水の入ったコップをみつつ並べ、どのコップでもいいから鉄のスプーンと木のスプーンで水を軽くかき混ぜてくれと後ろを向いた。

俺はちよつと意地悪く、ひとつのコップには何もせず、ひとつのコップには木のスプーンで、ひとつのコップには木と鉄のスプーンで水を混ぜた。

「これは何もしてないお水で、これは木のおいがするー、こっちは木と鉄のおいー」
 一部始終を見ていた俺とエステルは驚いた。なお、俺たちがメルと同じようにコップの水を味わってみたが、その違いはまるでわからなかった。

「ほとんどの毒には……わたしたちの家族に盛られた毒にも、独特な香りがあります。そのため毒を使用するときには強い香りの料理を併用する必要があるのですが、メルの嗅覚なら気づくかもしれません」

エステルは、不安や申し訳ない気持ちや嬉しさと、わたわたししていた。
 だが、これで毒見の安心感は増しただろう。

俺とメルが食べたあとにエステルもパンを一口。焼きたての山型パンにバターを載せてうっとりしている。

焼きたてのパンにバターは幸せの味だ。俺の顔もうっとりしていることだろう。

しばらく情報のすり合わせを忘れ、一心不乱に飯を食べる。全員育ち盛りなので、またたくまにパンが消え、シチュー壺が空になる。ごちそうさまでした。

「わたしの報告です。先に話のあった剣の男性とリトルフィートの男性についてはわかりませんが、あの山脈について調べてきました」

リザール山脈のことを調べてくれたようだ。そこに住む危険な怪物や魔獣について、遺跡について、大きな出来事についてなどだ。

直接役に立ちそうな情報ではないものの、これから向かう場所のことは十分に把握できるものだった。

ボッグに面した北側にある山脈はかなり調査が進んでいて、今あるのはからっぽの遺跡ばかりなのだという。一方で、南側の山脈はまだほとんど調査が進んでいない。というのも、魔物たちの強さが跳ね上がり、巨人やドラゴンといったものの目撃例まであるのだという。

俺も町長から多少聞いていたが、具体的な魔物の名前などを挙げられると、改めてヤバさが伝わってくる。

「メルが見た雲の流れだと、たぶん北側だと思うー。ドラゴン会ってみたいー!!!」

現状ではほぼ唯一の手がかりである「雨雲が吸い取られるように消えた」場所については、メルの野生の勘だけが頼りだ。おそらく猟兵の天候予測スキルみたいなものが働いたんだと思うが、これに賭けるしかない。

「メルが聞いてきたのは、さっきいった剣の男と、男の子の話ー。剣の男がやっぱりロープと保存食買って三日前くらいに山に向かって、男の子も今日の午前中にロープと保存食買っていったってー」

ふむふむ。男の子は俺が聞いた限りだと、リトルフィートで間違いなさそうだな。剣の男はほとんど町の間人と言葉を交わしていないみたいだが、いずれにしても動機がよくわ

からない。単身山に向かつて遺跡を調べられるレベルなのだろうか？

「剣の男性とリトルフィートの子供は仲間なのでしょうか？ 同じパーティで、後から合流といった」

「戦士と盗賊のパーティか……可能性はあるだろうが、時間差が気になるな。もつともリトルフィートはいい加減な種族だから、三日ぐらい待ち合わせに遅れるのは理解できるが」

リトルフィートのプレイヤーは、キャラを立てようとするあまり、わざとクエストから逸脱する行動を取りたがる。その結果、本人すら予想しなかった事態となり、パーティとマスターを困らせることがある。

かつて俺の仲間のリトルフィートも、集合する前に悶着を起こし、急遽シナリオが仲間の救出劇となったこともあった。

「エステル。町側の山脈で出てくる強めの魔物っていうと、何が出たっけか」

「トロールやグリフォンがいます。あと、アンデッドもいくぶん多く出るようです……」

もし、剣の男が単体でこれらの相手をする実力があるとすれば、相当なものだな……

俺はともかく、一対一だと魔術師のエステルには危険なレベルか。メルがいれば、仮にふたりで山に行ってもそここの魔物の相手はできるだろう。

「町側の山脈は、遺跡調査が終わったはいいいけど、放置されて怪物の住処になっているっ

ぽいなー」

「山に入った方の目的は……腕試しか何かでしょうか？ 場所にもよりますが、リザール山脈にひとりで入るといえるのはかなり危険だと思います」

「メルとお姉ちゃんとメテオ様がいれば大丈夫だよー」

確かに俺たちで行くなら平気だろう。魔法を使えば無補給で南側のヤバイといわれる側まで調査できるだろうし。

「いずれにしても、解決するのは雨雲の件だ。いざとなったら、大きな川から支流を通して水呼び込むこともできるというから、まだ水不足までいかないだろうけど、それは緊急用の水路だからどうも整備が怪しいらしい。できれば雨を降らせて解決してやりたいな」

冒険者の店でマスターから仕入れた情報だ。町の人間の多くは水不足についての認識が甘い。というのも、いざとなれば大陸の東西を流れる二本の大河、寶石川と朽縄川から水を引けるから。

だが、マスターは楽観視していなかった。

「あの川から支流を引いて、一旦ダムを作って大陸各地に水を送るシステムっていうのはあるんだがな……あれはユルセル三世の御代でできたもんで、もう五、六十年前のシロモノだ。まともに機能するとは思えんし、水の通り道にできた村もあるだろうから厄介

だぞ」

「その治水ルートの一度も使ったことがなかったんですか？」

「なかったんだ。ウルセールはそこそこ雨も降るし、どこを掘っても井戸が使える。ウルセールⅢ世がもしものときのために作ったものらしいが、その後整備をまったくしなかったんだよなあ」

——俺はそのくぐりやふたりに説明する。エステルも読み込んだ本の中でそのことは知っているようだ。

「ボツグでも水不足の可能性を危険視する見方があつて、せめてこの地域周辺の治水工事だけでもやっておくべきだ、という話が数年前に持ち上がったようです」

「へえ。それが成功していれば俺の出番はなかったのになあ。何でその計画はダメになっちゃったの？」

「現国王ウルセールⅤ世の許可がおりなかったのです。すでにあるもののメンテナンスとはいえ、ウルセール領での治水工事は王の許可がないと開始できないので断念したようです。不許可の理由は、主に予算の関係とのことです」

……ウルセールの国王は、なんかダメ人間の気配がプンプンするな。

この国はそういう豊かな国のはずだぞ。治水工事の予算をケチるとか意味がわからない。一般的に老舗しよぼというのは「一代目で財を築き、二代目で店を大きくし、三代目でそれを

食いつぶす」というけれども、ウルセールの三代目はがんばったようだ。四代目のことはよく知らないが、五代目にしてピンチなのかもしれない。

「エステル。現国王というのはアレだ、ちよつと頭が弱いのかな」

「え、いや、そんなことはないはずですよ。ここ数年で魔法嫌いとか政策が独断的になったという話がありますが、在位してから今までの二十年近くはうまくウルセールを治めてます」

そうなのか。てつきり俺はもつとバカ殿ばかどのみたいなイメージだったんだが。

「ウォルスタでは、自治領を正式なウルセール領土にするみたいなきかけがあつたので、あまり評判はよくありませんが……王国全体で見れば評判がいい王様です。跡取りの王子様も今十五歳で、世継ぎの問題ありませんし」

「世継ぎまでいるのか。現国王の年齢ってわかる？」

「はい、カザン・デイストール・レイド・ウルセールⅤ世様は今年で五十二歳になられたはずですよ」

俺のいた日本ではまだまだ働き盛りの年齢と言えられるけれども、この世界だと老人扱いかな。

「全部のことをカンベキにできるやつなんていないわけないか。どうも俺はウルセール国王嫌いなんだけど、そこそこ国をまとめているならいいか。ウォルスタにさえ手を出さな

きや」

「そうですね。今回の天候不順の謎を解き明かして早く帰りましょう」

エステルは山脈の地図を出してポツリと呟いた。

「……お師匠様は、原因を予想していますか？」

「いくつか予想している。天候を操る魔法装置の暴走あたりかなと。ただ、山に入った剣士とリトルフィートっていうのがどうもうまく繋がらない」

「いっそ無関係な偶然かもしれないねー」

メルが案外核心かもしれないことを突っ込む。

「それだったらいいんだけど……心配というか、最悪のケースも考えておかないとな」

「最悪の場合はどうなるのー？」

「剣士は、ストームプリンガー、バルムンクだっけか？ そいつの可能性があるなと」

エステルとメルの表情が硬くなる。この世界では、プリンガーといえればひとり世界のパワーバランスを変えることができる存在だとされている。緊張もするだろう。

「……なんで、ストームプリンガーがこの町に!？」

「予想な。あくまで最悪の」

驚かせすぎたか。できれば俺もこんな場所で会いたくない。

「だとしても、少なくとも俺たちの暗殺とかじゃないだろう。目撃情報が普通にある。暗

殺するつもりだったらもつと違うチャンスがあるだろうし」

「じゃあなんでストブリはここに来るのー？」

「……ストブリ？ ああ、ストームプリンガーを略したのか。それいいな。俺も使おう。」

「それはわからん。ストブリの能力はおろか顔も何もわからないが、俺たちが警戒しなくちゃいけない人物ってことで、可能性を考えているだけ」

それよりも俺にとつて厄介なのは、もうひとつの可能性だ。

「むしろ、リトルフィートの男のほう俺には脅威だ」

自然と自分の表情が暗くなるのがわかる。もし、そのリトルフィートが俺の知るリトルフィートだとすると、ストブリなんかよりもつと面倒くさいからだ。

「リトルフィートの男の子くらいならメルがやつつけるよー!!!」

「……そうだな。メルが頼りかもしれない」

俺は熟考の末、宣言する。

「いいか、ふたりとも。もし山でリトルフィートに会ったら全力で行け。攻撃されたと感じたら一切手加減不要で、息の根を止めるつもりで——」

無言で親指を下に向ける。

こんなにも緊張した俺を見せるのは初めてだ。ふたりも緊張して無言で頷く。

本当に、俺の知るリトルフィートだとしたら極めて危険だ。俺のレベルでも手を焼くかもしれない。

「——さて。今日は日も暮れたし、ここで一泊するか。山は明日の朝から向かうぞ」

本当は町長の家に泊まることもできたのだが、エステルは貴族の家に泊まるのに抵抗があるらしい。まだ町の冒険者の店のほうが安心できるのだという。その点については俺も同意見だ。貴族の家とかだと、夜中にふらふら出歩いたりしにくいしな。

「マスター、部屋をふたつ!! 一人部屋と二人部屋。なかつたら大きな部屋ふたつでもいいよ」

「あー、すまん。今、山に出ているパーティが荷物置きにしちまって部屋ふさがっているんだよ……三人部屋ならひとつ空いているが?」

あ、俺はぜんぜん構わないんだけども——

「メルは大丈夫だよ!! みんなで寝るのー!!!」

「……わたしも大丈夫です。着替えのときだけ見ないでいただければ……」

見ない! 見ませんか!!

なんかエステル、俺のことちよつとエロおやじみたいに見ている感があるな。いや、実際そう思われても仕方がないような言動してたしな……

「じゃ、じゃあ三人部屋お願いします」

「あいよ。坊主、明日は早いんだから夜はがんばりすぎるなよ。両隣は無人だからちよつと大きな声くらは平気だからな」

ななななな、なんてこついわはりますか!?!

見ろ!! エステルとか完全に顔真っ赤にして俯うつむいてるし!!!

「違います違います! 俺たちはそういう関係じゃ」

「ちよつとからかっただけだ。本気にするな、はははははは」

ハハハじゃねえよ!!

正直、俺の精神年齢はおっさんだし、身体は若さはみ出さんばかりの十代だしで、性的にいろいろ思うところはなくもないが、パーティメンバーや弟子に手を出すほど鬼畜きこくじゃない。

もうホントそういう下ネタやめてほしい。

心が自制を振りきってナニしてしまいうで怖いからホント勸かへん弁……

5 ライアー

朝一番でボッグの『山脈亭』を出て、町長に預けていた馬車を回収して山に向かう。

籠^{かご}までは馬車で行けるけれど、そこから先の山道は馬では無理とのことだった。だから、普通であれば馬車は町に置いていくものらしいが、そこはゴーレム馬であるコマットの強み。

水も食料も必要ないし、逃げたりすることもない。しかも、馬の形をしているがこいつの強さはアイアンゴーレムに匹敵^{ひつご}する。下手に野盗が馬車を荒らそうとしても、文字通り蹴^け散^ちらされて終了だろう。

出発前にもう一度《天候操作^{テンコウサウザ}》を使ってみた。メルによく観察してもらったためだ。どうやら雨雲は山脈のある一点に向かつて吸い寄せられているとのことだ。

「間違いないと思うのー。今のでもうメルだいたいどこらへんか案内できるよ!!」

猟兵^{リョウヘイ}スキルの天候予測の応用だろうか。それとも猫族固有の野生の勘^{かん}でもあるのか。いずれにしてもありがたい。今回の騒動の原因のひとつは、確実にそこにあるに違いない。

「雨が降らないというのは、冒険者的にはありがたい話ではあるんだけどな」

ゴトゴトと馬車に揺^ゆられながら呟^{つぶや}く。今はメルにコマットの制御を任せているので、俺とエステルは馬車の中だ。

思えば二十年もテールトークセッションをしてきたけれども、雨の描写があったゲームってのはほとんどなかったな。

よほどのことがない限り、テールトークRPGでは必要のない生活描写はしない。

ゲームを進める上でテンポが悪くなるからだ。ゲームマスターによって様々だけれども、中にはSTRのパラメーターから持てる重さを厳密に割り出して、装備品の所持数を管理するマスターもいる。逆に「重さの概念は面倒なので、常識の範囲で無視します」というマスターだっている。石井先輩もそのタイプのマスターだった。

この世界は『アヤタレウ』の面影^{おもかげ}を強く残してはいるが、ところどころが微妙に違う。もちろんテールトークRPGとは違い、何の意味もない通り雨に見舞われたり、理不尽な偶然で辻褄^{つじま}の合わない事件が起こったりするのだろう。しかも、俺が見ていない場所で、俺が気づくこともなく。

思えば普通だ。それが現実だ。

ここは現実の世界。魔物がクリティカルを連発したとき、マスタースクリーンの裏側でこっそり出目^{でめ}を操作してくれる優しいゲームマスターはもういないんだ。

ちよつと震えが来た。

いくら^{知性}INTが上がっても、MNDが上がっても、人格的な面はあまり変わっていないようだ。

INTは魔力や行為判定のプラスに、MNDは単純に魔法の回数と、何か困難があったときに耐えることができる数値と思っただけがいいだろう。

——もつとも、人格まで変わってしまったら、それはもう俺じゃあないだろうけどな。

「お師匠様。お師匠様」

馬車の中、エステルが長持の中から奇妙な道具を取り出し出していた。

「長持の中を見てみたら、こんなものがありましたよ」

それは、大きなテニスラケットから柄を取ったような形をしていて、ところどころ切れてはいるものの、ガットが一方だけ張ってあった。ああ、これはラケットじゃない。

「ライアー……か？」

「ええ、馬車の前の持ち主さんが使っていたんでしょね。ちよつと壊れますけど」

ライアーとは竖琴の一種で、持ち運びできるサイズから少し大きめのものまである楽器だ。俺は、この楽器が使われているアニメの主題歌の演奏シーンをテレビで見て、たまたま知っていた。

馬車の前の所有者が残していったんだろう。

「ところどころ弦が切れてますけど、生きている弦を張り直せば弾けそうです……貰ってしまってもかまいませんよね？」

エステルが両手でライアーを握り、控えめに提案する。

「そういえば俺、エステルの設定で「楽器演奏が趣味」ってつけた覚えがあったな。

「什器付きで買ったものだから問題ないだろ。エステルの演奏、楽しみだな」

「えへへ。すぐ直してみますね」

あらかわいい。

エステルは嬉しそうに木杵から弦を緩め、死んでいる弦を取り、生きている弦を張り、並べ直す。ときおり爪弾いては音のチューニングをして、みるみる心地よい音を奏でるようになっていった。

「これ、けっこういいライアーですよ。もともと四十弦もあるやつで、生きている弦だけでも二十五本は使えます。わたしがちよつと手を入れるだけですぐ弾けます」

「といって和音を鳴らす。引つ掻くような音を伴った、やさしい音色だ。」

「いけます。ちよつと大きめだから馬車に置きっぱなしにしていたライアーだったんでしょね。お師匠様は何カリクエストはありますか？」

「いや、俺は音楽のことはほとんどわからないんだ……エステルの好きなのを頼むよ」

改めて思い知らされるが、俺はこの世界の歌や曲なんて一曲も知らない。この世界の歌か。楽しみだな。

「じゃあ、わたしの好きな歌で……」

ゆつくりとした伴奏が始まった。一音一音主旋律だけをしっかりと爪弾く感じは童謡のようであり、賛美歌のようでもあった。

歌はソプラノの声で、小さく囁くように始まった。

立ち読みサンプル
はここまで

わたしたちもまた
迷える子羊だと知り

どびだしてきたわが家を探し
その響きを求めている

見いだしてくれた腕
泣いているわたしを包んで
やさしく守られていた
あの安堵あんぶを忘れまい

あのとき感じた
あのときの気持ちのまま
今も昔と同じように
歌をささげよう

「……お粗末様そまつさまでした」

